

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：33925

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2011～2014

課題番号：23242018

研究課題名(和文)ポスト・グローバル時代から見たソ連崩壊の文化史的意味に関する超域横断的研究

研究課題名(英文)Trans-Area Studies on the Cultural meanings of the Collapse of Soviet Union from the viewpoint of Post-Global Era.

研究代表者

亀山 郁夫 (KAMEYAMA, Ikuo)

名古屋外国語大学・現代国際学部・教授

研究者番号：00122359

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 30,000,000円

研究成果の概要(和文)：ソ連崩壊は、第二次大戦後の冷戦に終止符を打ち、グローバル化の流れを加速させた世界史的な事件である。本研究では、国家崩壊期の困難な状況の中で、主に旧ソ連の作家や芸術家が、どのような歴史意識のもとで自らの創造性を発揮したかを分析しながら、雪解け後約半世紀におよぶソ連・ロシア文化の根に潜むスターリン主義の意味を明らかにした。また、この問題意識をとおして、ソ連崩壊が生んだ最大の悲劇の一つであるロシア・ウクライナ間の紛争にスターリン時代に双方の国民が受けた精神的傷がいかに深く関与しているかを解明した。

研究成果の概要(英文)：The collapse of the Soviet Union was a world-historical event which put an end to the Cold War started after World War II and accelerated the flow of globalization. In this study we researched how and with what historical consciousness the writers and artists of the former Soviet Union developed their activities and demonstrated their creativity, and elucidated the meaning of Stalinism, concealed in the depth of their works, created during the 50 years from the “Thaw period” to the present. We also clarified how widely the mental damage done to both peoples in the era of Stalin is tied with today’s Russian-Ukrainian conflict.

研究分野：文学(ヨーロッパ文学)

 キーワード：ロシア文学 ソ連崩壊 全体主義 チェルノブイリ ペレストロイカ 歴史ファンタジー ポストモダ
ン ウクライナ紛争

1. 研究開始当初の背景

旧ソ連の文化は、検閲による厳しい抑圧のもとに置かれ、その中で社会主義リアリズムやソツアートと呼ばれるポストモダン文化の進展を見てきた。だが、ゴルバチョフによるペレストロイカ、グラスノスチ政策の導入によって検閲システムはほぼ機能しなくなり、それによってソ連末期の文化や芸術の質そのものが根本から変化した。その際、旧ソ連・ロシアの担い手である作家や芸術家たちは、自らの足場を、ヨーロッパ的な価値観に軸足を置くか、社会主義リアリズムを受け継ぎ、その延長上に芸術作品を構築するか、あるいは、その双方を足場として独自の第三の道を行くか、それぞれに選択を迫られた。ヨーロッパ的な価値観に足場を置く芸術家たちは、スターリン時代の再検証を強く要請するグループと、より内省的な立場から脱イデオロギー的な姿勢を取ろうとする芸術家たちに分かれた。後者のタイプは、アレクサンドル・ゲニスが規定する亡命の「第三の波」を形成するに至った。従来旧ソ連・ロシア文化の研究は、ペレストロイカ以前厳しい禁制下に置かれた文学芸術作品の再評価という視点に偏りがちであったため、国家崩壊の現実が新しい時代の文化にイデオロギー面、想像力面でどのような影響を与えたかという問題にまで触手を伸ばすことができなかった。また、従来旧ソ連・ロシア文学・文化の研究では、同時代の歴史的状況に対する認識がネグレクトされてきたため、実際にそれらを楽しんでいる市民の側の意識といった問題はほとんど捨象されてきた観があった。本研究では、それらの意味を踏まえ、ソ連崩壊に関わるさまざまな歴史的事実に焦点を当てながら、その現代的な意味を探ることを最大の課題とした。

2. 研究の目的

本研究は、ソ連末期からその崩壊に至るプロセスを、従来からある常套的なイデオロギー的な視点や、政治経済的な要因からだけでなく、現代的な文化研究の方法論と理論を踏まえた文化史的観点から究明することを目的としている。その背景には、ソ連崩壊後、ある程度の時を経て、ソ連時代の全体主義文化の新たな理論的解明の道が、従来のイデオロギー的枠組みに頼らず、日常生活や、「親密圏」「公共圏」といった観点からの分析によって切り開かれてきたという研究動向があり、本研究は、ソ連時代の全体主義文化を単に政治経済的条件の副産物として見るのではなく、独自の意義と価値体系を備えた自律的な文化的システムとして把握することにより、現代の文化理論（特に国家と大衆文化の関係の領域における理論）一般への理論的な貢献を果たすことができる。ソ連時代の文化の理論的枠組みをなした社会主義リアリズムの現代的な再検討は、すでに西側の研究書によって先駆的な道が切り開かれたが、最

近ではさらに、文化史的な観点から、スターリン時代から後期社会主義時代における芸術・文化とイデオロギーの関係に現代の文化理論を踏まえて分析のメスを鮮やかに入れた研究が次々に出ている。本研究ではそれらの成果を踏まえ、その著者たちとも連携を図りながら、旧ソ連時代および現代ロシア文化の解明を進める。

3. 研究の方法

4年間の研究期間を通して本研究は、以下の4セクション（言語文化セクション／表象文化セクション／歴史文化セクション／政治文化セクション）ごとに個別研究を中心に進めた。個々の研究発表の場として、年1回程度、研究集会を東京ないし地方で開催し、分担者、連携研究者、協力者がそれぞれに研究報告を行うとともに、それらの個別研究を総合する目的から、各年、総括トピックを設定し、国際シンポジウムないしワークショップ等を開催してその活性化を図った。初年度の総括トピックとして選ばれたのは、ソ連崩壊とチェルノブイリの悲劇の相関性であり、一般市民への参加も呼びかけながら国際シンポジウム「にがよもぎの予言：チェルノブイリの悲劇とソ連崩壊20年」を開催した。第2ステージにあたる平成24年度は、個別の研究形成に集中し、平成24年7月に当該年度最初の研究集会を開催し、共通の総括トピックとしては、東京大学大学院主催の国際シンポジウム「グローバル化時代の世界文学と日本文学：新たなカノンを求めて」を協賛した。第3ステージにあたる平成25年度は、恒例の夏季の研究集会の他、各セクションの研究者の成果発表と、海外の研究者との連携を主たる目的として、グローバルシンポジウム「ロシア文化の悲劇 国家崩壊期の芸術」（名古屋）を開催した。これには市民への参加も呼びかけ、150人近い参加者を得ることができた。これは、当初予定していた日中韓国際フォーラム「ペレストロイカ文化の再考」（仮題）が開催困難になったため、根本の枠組みを変えずに欧米の研究者の参加によって実現の運びに至ったものである。第4ステージにあたる平成26年度は、これも夏季の研究集会の他、本研究の最終総合的な意味を考え、ストックホルム大学のA. リュングレン教授を招聘し、国際ワークショップ「ソ連崩壊と歴史ファンタジー文学の可能性」を開催した。

4. 研究成果

(1) 試走段階における成果

研究期間の初年度である平成23年度は、研究組織のセクションごとに個別の研究を発表することが、研究成果の中心となった。まず言語文化セクションでは、ソ連解体から20年を経た現在のロシアの文化状況をふまえ、ソ連期の文学について様々な角度から考察を行った。具体的には、ロシア・フォルマリ

ズムの方法と概念をめぐる論考、A・ソルジェニーツインの文学作品の考察、亡命者の文学などについて論文、著書、学会発表を行った。また以上との関連において、ソ連解体後のロシア文学についても数々の著作が刊行された。表象文化セクションではまず、ポストモダンの芸術家I・カバコフの絵画やインスタレーションなどの空間の芸術作品についての研究成果を発表した。次に、チャイコフスキーやストラヴィンスキーの作品を対象として、ソ連期から現代にいたるロシア音楽研究の変遷が明らかにされた。政治文化セクションでは、ソ連解体後20年をふまえ、「全体主義」体制の比較考察を行うとともに、現代の社会意識の動向を分析した。初年度の総括として、ソ連崩壊の文化史的意味という本研究の基本的な視座を明らかにするため、国際シンポジウム「にがよもぎの予言：チェルノブイリの悲劇とソ連崩壊20年」と題するシンポジウムを開催した。ウクライナから作家のS・ミールヌイ氏を招き、チェルノブイリ原発事故の過去と現在をレポートしていただくとともに、ソ連崩壊と本事故の関わりについて考究した。「ソ連崩壊20年を考える」と題するシンポジウムでは、ソ連崩壊過程における文学と文化の状況、政治の面からソ連解体をもたらしたモメントとその変動過程、ソ連崩壊についての現代のロシアにおける意識動向を探った。

(2) 形成段階における成果

研究期間の2年目となる平成24年度は、まず政治文化セクションでは昨年度に引き続き、ソ連崩壊過程についての新しい視点による研究成果を生んだ。ソ連構成共和国間の関係を、ソ連解体をはさんで「擬似国際関係」から新しい国際関係への移行という枠組みに関する研究である。また、新たに公表された資料をもとにソ連崩壊についての世論分析を行った。ソ連崩壊過程の考察は、ソ連時代末期の政治と社会の構造の解明につながるものであり、また、体制転換後の旧ソ連諸国の文化と社会を考察するリアルな視点を提供してくれた。言語文化セクション、表象文化セクションの研究もまたそうした広がり共有した。文学の研究では、ソ連崩壊後のロシアにおける詩、および文学全般について幅広い研究が行われた。その代表例として挙げられるのが、ショスタコーヴィチの作品をスターリン体制のみならず冷戦体制全体の中に位置づけた研究であり、とりわけ晩年の歌曲集「レビヤードキン大尉の四つの歌曲」に関わる分析は、長く旧ソ連の文化において支配的であった政治と文化のパラドクスを浮き彫りにする研究である。また、ソ連崩壊は、冷戦の終焉とほぼ並行して展開したがゆえに、旧社会主義圏であるモンゴルにおける文学と戦争についての研究も、本研究組織の大きな成果として挙げるべきものである。表象文化ではさらに、M・パフチンの研

究、ロシア・フォルマリズムの研究、演劇、美術を対象とした研究など、多彩な成果が得られた。以上の研究成果をふまえ、3月3日・4日に開催された東京大学大学院主催の国際シンポジウム「グローバル化時代の世界文学と日本文学：新たなカノンを求めて」を協賛した。

(3) 成熟段階における成果

本研究の最大の成果は、平成24年8月17日に学士会館で開催された研究集会、そして特に、平成25年3月8日に名古屋ガーデンパレスで開催されたグローバルシンポジウム「ロシア文化の悲劇 ペレストロイカ再考」である。前者においては、20世紀を代表するロシア作家V・グロスマンの長編小説『人生と運命』(全3巻)をめくり、長尾広視氏の書評原稿に基づく塩川伸明と赤尾光春のコメントを軸としつつ、総計4時間にわたる集中討議を行った。個別報告では、鈴木義一が「ロシアの反政府運動と《中間層》をめぐる意識動向」と題する報告を行った。次に、平成25年3月8日のグローバルシンポジウム「ロシア文化の悲劇 国家崩壊期の芸術」では、E・ジョーガチ(モスクワ写真大学)、K・ボグダーノフ(ロシア科学アカデミー)、V・イワノフ(UCCLA、原稿代読及びスカイプによる参加)、亀山郁夫(名古屋外大)が、文学、文化、美術、映画の諸領域にまたがる基調報告を行い、分科会では、岩本和久と鴻野わか菜が個別の報告を行った。基調報告では、ソ連崩壊期から現代に至るまでの25年間に、ロシアの映画界および演劇界がドストエフスキーの作品をどう表象化したかという問題が取り上げられたが、これもまた、ソ連崩壊の文化史的意味を逆照射する新しい方法論足りうることを証明した。また、基調報告者をメインとするラウンドテーブル「ロシア文化の悲劇をめぐって」では、ソ連崩壊をきっかけとして顕在化したロシア文化固有の悲劇性はどこに存在するか、をめぐって、主として、文化と国家の相克と共生という視点から議論が交された。ソヴィエト全体主義に対する各自の考え、芸術観、国家観を投げ所として独自の考えが表明され、総じて、政治あるいは歴史や経済という外的かつ社会状況とのコンフリクトのなかでこそ大きく飛躍する20世紀ロシアの文学、芸術の運命及びその本質が浮かび上がった。

(4) 総括段階における成果

最終年度の研究成果は、平成26年9月に催された成果発表会(名古屋)および翌年2月に開催された国際ワークショップ「ソ連崩壊と歴史ファンタジー文学の可能性」(東京)の二つに集約される。前者の討論A「『ソヴィエト文明の基礎』を読み解く」では、A・シニャフスキーの著作を参照しつつ、国家崩壊に至るソ連の文化史の帰趨をめぐって総合的な質疑応答を行い、討論B「ソ連崩壊と

ウクライナ問題」では、折からのウクライナ紛争を背景に、ロシア側、ウクライナ側の双方論理を対抗させつつ、問題点を明らかにした。後者の国際ワークショップでは、ストックホルム大A・リュングレン教授を中心に、「歴史ファンタジー」の領域における現代作家たちの問題意識の解明にあたった。リュングレン教授は、V・ペレーヴィンの問題作を通してポストモダン文学全体に通じるいくつかの問題系を提示し、個別の報告では、ソロキン、ペレーヴィンらを中心に、現代作家たちの歴史意識の変容、ユートピア的かつ終末論的なヴィジョンの意味などを明らかにした。最後に、研究代表者の亀山から、平成26年12月に行ったゴルバチョフ元ソ連大統領との単独会見についての報告があり、ペレストロイカ時代からソ連崩壊を経て現代に至るまでに歩んだ同氏の政治観の変貌が明らかにされた。亀山は、現に今もって未解決のウクライナ問題は、まさにソ連崩壊がもたらした最大の歴史的ジレンマであり、ゴルバチョフがベルリンの壁崩壊25周年式典で訴えた、ソ連崩壊の時点に立ち戻って新秩序を構築すべきであるという内容は、まさに本研究テーマ「ポスト・グローバル時代から見たソ連崩壊の文化史的意味に関する超域横断的研究」が計り知れず重要な可能性を秘めたテーマであることを裏付けるものと総括した。

(5) 全体の成果、インパクト、今後の展望
ソ連崩壊は、今から四半世紀前の出来事であるが、その歴史的な意味は色あせるどころか、ますますアクチュアルな問題を投げかけている。とりわけ、平成26年の2月にウクライナの首都キエフで起こったマイダン革命(後のウクライナ紛争)は、戦後秩序の見直しを迫る世界史的事件となったが、この問題の淵源に、ソ連崩壊という歴史的事実が抜きがたいモメントとして関わっていることを見逃すわけにはいかない。その意味において、本研究の参加者の多くが、今回の事件をめぐってさまざまな場で情報発信を行ったことは、本研究が全体として志向する超域横断的研究の何よりの成果であると考えられる。また、本研究が提示する「ポスト・グローバル時代」という時代定義は、今回のウクライナ紛争、あるいはソ連崩壊とともに起こった中東問題(ひいては「イスラム国」問題)につながる未曾有の状況を定義する用語として極めて有効性を勝ち得ていると確信する。その意味で、最後に、本科研費によってゴルバチョフ元ソ連大統領との単独会見を実現できたのは、大きな収穫であった。今後、これらの収穫を踏まえ、まとまった形での出版に結びつけることができれば幸いである。

<引用文献>
特になし。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計84件)

沼野恭子、衣服の二重性 またはラーマノフの挑戦、総合文化研究(東京外国語大学総合文化研究所)、査読無、第18号、2015、pp.6-24

鴻野わか菜、空への階段 ターニャ・バダニナの芸術、人文社会科学研究所(千葉大学大学院人文社会科学研究所紀要)、査読無、第30号、2015、pp.24-36

鈴木義一、ウクライナ問題をめぐるロシアの世論、ロシア・ユーラシアの経済と社会(ユーラシア研究所)、査読無、第991号、2015、pp.30-45

沼野充義、ナボコフと「ソ連」文学 ナボコフ『ロシア文学講義』への補遺として(ナボコフが論じなかったロシア文学)、KRUG(日本ナボコフ協会学会誌)、査読無、第7号、2015、pp.42-51

岩本和久、現代ロシア文学とSF的想像力、ロシアSFの歴史と展望(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)、査読無、第7巻、2015、pp.41-16

亀山郁夫、ロシアはどこへ向かうか、現代思想 特集ロシア(青土社)、査読無、7月号、2014、pp.28-37

Тэцуо Мотидзукки(望月哲男)、равнивая несравнимые: из опыта сравнительного исследования культур Евразийских стран、Вестник Азиатско-тихоокеанской ассоциации преподавателей русского языка и литературы、査読無、No.4、2014、pp.34-37

梅津紀雄、雪どけ期のソ連音楽政策の転換過程 中央委員会文化部文書に見るその実態、ロシア語ロシア文学(日本ロシア文学会)、査読有、第46号、2014、pp.111-130

前田和泉、詩と音楽、詩の音楽—ボリス・パステルナーク Давай роняйть слова 分析—、スラヴ文化研究(東京外国語大学ロシア語研究室紀要)、査読有、第12号、2014、pp.3-16。

〔学会発表〕(計 49 件)

Hikaru Ogura (小椋彩)、Migration in the Polish Documentary Film、International Symposium: Images of East European Literature: Their Variable and Invariable in the Past and Present、2014 年 9 月 28 日、立教大学池袋キャンパス(東京都豊島区)

Tetsuo Mochizuki(望月哲男)、The practice of color photography in S.M. Prokudin-Gorsky's *rodinovedenie*、SRC seminar “Seeing History: Photo and Film as a Primary Archival Source”、2014 年 8 月 26 日、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター(北海道札幌市北区)

〔図書〕(計 23 件)

塩川伸明、三元社、ナショナリズムの受け止め方 言語・エスニシティ・ネイション、2015、327

貝澤哉、ボリス・ラーニン(共著)、東洋書店、ソローキンとペレーヴィン 対話する二つの個性、2015、63

岡田和行、アドモン・プリント社(モンゴル・ウランバートル)、アルタン・ハラツァイ〔先駆者〕(モンゴル近代文学研究集成)、2014、242

諫早勇一、ロシア人たちのベルリン 革命と大量亡命の時代、東洋書店、2014、304

6. 研究組織

(1)研究代表者

亀山 郁夫 (KAMEYAMA, Ikuo)
名古屋外国語大学・現代国際学部・教授
研究者番号：00122359

(2)研究分担者

古賀 義顕 (KOGA, Yoshiaki)
東海大学・外国語教育センター・准教授
研究者番号：10397010

高橋 清治 (TAKAHASHI, Seiji)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・名誉教授
研究者番号：30126106

貝澤 哉 (KAIZAWA, Hajime)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：30247267

沼野 充義 (NUMANO, Mitsuyoshi)
東京大学・大学院人文社会系研究科(文学

部)・教授
研究者番号：40180690

鈴木 義一 (SUZUKI, Yoshikazu)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：40262125

岩本 和久 (IWAMOTO, Kazuhisa)
稚内北星学園大学・情報メディア学部・教授
研究者番号：40289715

鴻野 わか菜 (KONO, Wakana)
千葉大学・文学部・准教授
研究者番号：50359593

沼野 恭子 (NUMANO, Kyoko)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：60536142

塩川 伸明 (SHIOKAWA, Nobuaki)
東京大学・その他の部局・名誉教授
研究者番号：70126077

岡田 和行 (OKADA, Kazuyuki)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授
研究者番号：70143617

前田 和泉 (MAEDA, Izumi)
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：70556216

渡辺 雅司 (WATANABE, Masashi)
東京外国語大学・その他の部局・名誉教授
研究者番号：90133214

望月 哲男 (MOCHIZUKI, Tetsuo)
北海道大学・スラブ研究センター・特任教授
研究者番号：90166330

古川 哲 (HURUKAWA, Tetsu)
聖心女子大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：60714459

梅津 紀雄 (UMEDU, Norio)
工学院大学・基礎・教養教育部門・講師
研究者番号：20323462

(3)連携研究者

諫早 勇一 (ISAHAYA, Yuichi)
名古屋外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：80011378

加藤 有子 (KATO, Aiko)
名古屋外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号：90583170

小椋 彩 (OGURA, Hikaru)
東京大学大学院・人文社会系研究科(文学
部)・研究員
研究者番号：10438997